

音 楽 部 会

I. 研究の概要

1. 研究主題

「豊かな感性に ときめく心を」

～互いに学び合い、高め合う多様な学習活動の在り方～



2. 研究主題設定の理由

新学習指導要領が小学校では本年度から、中学校では来年度から全面実施される。音楽科の教科の目標を「表現及び鑑賞の(幅広い)活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽(音楽文化)と豊かに関わる資質・能力」を育成することを目指す、とされた。また、学習指導要領解説音楽編には「客観的な理由や根拠を元に友達と交流し、自分の考えを持ち、音楽表現や鑑賞の学習を深めていく過程に音楽科としての学習の意味がある」とある。

音楽科において児童生徒一人一人の個性や興味・関心を活かした歌唱、器楽、創作、鑑賞の多様な活動を行う中で、音や音楽、言葉などによるコミュニケーションを図りながら学習活動に取り組み、課題を解決していく中で身につく力は、未来を拓く子どもたちに最も必要な力の一つである。また、協働を通して音楽科のねらいに迫る資質・能力を育てていくことが、子どもたちがこれからの世の中をより豊かに生きていくための大きな力の一つとなるに違いないと考え、この主題を設定した。

3. 研究仮説

表現及び鑑賞の活動を通して、他者と協働しながら(学び合い、高め合う)多様な学習活動を行うことで、音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情(ときめく心)を育むとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を養うことができるのではないかと考えた。

4. 研究内容

研究内容1〈小学校〉

互いに学び合い、高め合う多様な学習活動の在り方の研究を行う。

- ・協働的な学び
- ・対話的で深い学び
- ・言語活動の学びの充実

研究内容2〈中学校〉

互いに学び合い、高め合う多様な学習活動の在り方の研究を行う。

- ・協働的な学び
- ・対話的で深い学び
- ・言語活動の学びの充実、生活や社会における音楽の意味や役割の学び合い

5. 研究方法

- (1) 今年度(2020年度)の研究に基づいて課題を明確にし、指導の手がかりを得るために、理論指導研修会を開催する。
- (2) 研究主題解明に向けて、新型コロナウイルス感染症について配慮しながら実践した授業の記録を「授業実践報告」として作成し、研究の成果と課題をまとめる。その資料は、部会員に環流する。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過 小・中学校

(1) 中心グループによる研究経過

- 4月17日 石教研第一次研究協議会 → 中止
 専門部会役員研修会 → 延期
- 6月16日 石教研専門部会役員研修会
 研究計画の概要の確認
- 7月～ 各市町村にて、「授業実践報告」の取組への連絡と確認
- 12月11日 理論研修会 千歳市立千歳第二小学校

(2) 中心グループでの研究成果

今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、例年通りの授業実践を行うことが困難になったため、中心グループによる研究協議・発表を中止した。部会員が実践した記録を「授業実践報告」として個人で作成することとした。(下記参照)

2. 専門部会の取組での交流

(1) 市町村部会の活動とまとめ

新型コロナウイルス感染症の影響により、歌唱を中心とした授業実践が困難になる中、部会員が学習内容を工夫し、実践した授業の記録を「授業実践報告」(レポート)として個人で作成することとした。研究の成果や課題について各市町村で協議することが難しいため、「授業実践報告」に成果と課題を加え、個人でレポートにまとめた。7月から各市町村へこの取組について連絡し、作成期間を11月までとした。

(2) 役員、推進委員研修会での交流内容

① 実践・レポートについて

「授業実践報告」(レポート)は前半の取組としていたが、レポートの提出期間を11月まで延長し、役員や推進委員から作成について積極的に呼びかけた。研究の成果と課題について交流することが難しいため、年度末にレポート集を作成して部会員に配付する予定である。

② 成果と課題

<成 果>

- ・新型コロナウイルス感染症の影響で合唱が十分できない分、楽譜を読んだり、強弱を考えて楽譜に書き込んだり、範唱をじっくり聞いたり、普段あまりできない活動ができた。
- ・鑑賞、リズムなどの学習に、時間を十分使うことができた。
- ・歌唱については、大声で歌わない、間隔を空けて並ぶ、時間を区切って歌わせる、フェイスシールドを使用するなど、工夫して行うことができた。
- ・場所を考えて授業を実施する工夫がされていた。
(体育館などの広い場所で窓を開けて歌やリコーダーの練習をする、暖かい時期には外で授業を行うなど)

<課 題>

- ・合唱が十分にできない学校が多かったため、学習内容に偏りが出てしまった。中学校では鑑賞やリズムの学習が増え、小学校ではリズム、楽器、身体表現などが多くなった。
- ・小学校の学芸会の内容はリコーダーや器楽が中心となり、歌は少なかった。
- ・中学校の合唱コンクールは参加しなかった学校もあり、取組自体が難しかった。
- ・歌で表現することで発散していた生徒もいたが、歌以外の内容で思いを表現させるということが難しかった。
- ・学校によって、実践できることとできないことに違いがあった。
- ・校内でも学年によって取組に差があり、歌う際にマスクをしたりしなかったりなどの違いが見られた。
- ・レポートの提出数が少なく、11月まで期間を延長して取り組むことになった。

Ⅲ. 教育課程研究

1. 研究の経過

小学校においては、昨年度、新学習指導要領の施行に向けて教育の作成を行った。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止に向けて、内容を十分考慮しながら実践することとなった。中学校においては、次年度に向けて教育課程を作成した。

2. 研究の成果・課題

中学校の年間指導計画作成においては、新型コロナウイルス感染症の影響で個人での作業が多くなったため、協議、相談しながら作成することが困難だった。

Ⅳ. 実技・理論研修会

小・中学校【理論研修会】

1. 研究の内容

12月11日（金） 13：30～15：00 千歳市立千歳第二小学校

講師：筑波大学附属小学校 教諭 高倉 弘光 氏

題名：「新指導要領の趣旨とコロナ禍の音楽授業」

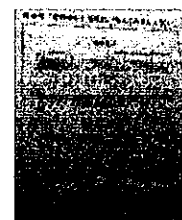
新型コロナウイルス感染症の対策を講じた、音楽科としての取組をより深めることを目的とした、Zoom による研修会。




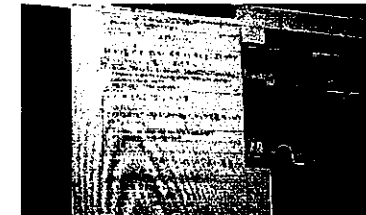
< 研 修 の 様 子 >

新学習指導要領における音楽科の改訂のポイントとして、「目標」にある3つの資質能力「知識及び技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性の涵養」を備えた人間の育成を目指すこととしている。どの領域に関しても、3つの資質能力について考えることになった。ところが、「内容」では「目標」と異なり、「思考力・判断力・表現力」「知識」「技能」の順で明記されている。つまり、音楽科は「技能教科」ではないという意識が必要であり、コロナ禍において、一層このことを意識する必然に迫られた。題材や教材でどのようなことに気づかせ（知識）、どのようなことを考えさせ（思考）、どのような技能を身につけさせたいのか（技能）、あらかじめプランを立てることが重要である、というお話があった。



3年 「春の小川」を例にして考えてみると、楽譜の1段目には、音符の読み方が書いている。楽譜の正しい読み方が習得できる楽譜の並びになっており、ドレミが読める、歌える力を身につけることをねらいとしている（技能）。2段目を見ると、読み方が書いていない。音符が反復しており、最後だけ終わりの形になっていることがわかる。楽譜のア、イ、エはほぼ同じ（反復）になっていることに、子どもが自ら気づく力が問われている。



| | |
|--|---|
| <p>共通教材は、歌い継いでほしいという願いが込められており、何度も歌うことが必要である。方法の一つとして、「ドレミ体操」を紹介され、会場で実践した。</p> <p>「ドレミ体操」とは、両手をまっすぐ前に伸ばして立ち、音の高さに合わせて手の高さも変えて歌う方法である。</p> <p>※主音（ド）→両手を下へ伸ばす。音は最後に主音に戻る。</p> <p>※ソの音は真ん中なので、両手をまっすぐ水平に伸ばす。</p> <p>①ドレミ体操でドから順番に歌う。（先生の後についてやってみる。両手は徐々に上に上がる。）</p> <p>②春の小川を「ドレミ体操」で歌う。</p> <p>③ゲームへと発展させる。（「ドレミ体操」をしながらミしか歌わない。→ソやファでも試してみる。）</p> <p>※「春の小川」のドレミ体操では、シが一回しか出てこないことに気づく子が出てくる。（知識）更に、ミだけ歌わないようにするなど、遊びの中から子どもが考え出すようになる（学びに向かう力）。</p> |   |
| <p>「ドレミ体操」を実践する様子を、ビデオで鑑賞した。（筑波大附属小学校 6月30日の実践）</p> <p>①春の小川をドレミ体操で全員歌う。</p> <p>②ドレミのグループに分かれて、「春の小川」を「ドレミ体操」で歌う。（1人1音だけ担当して歌う）</p> <p>③「ドレミの歌」を「ドレミ体操」をしながら歌う。（二部に分かれるところが、はっきりわかる。）</p> |  |
| <p>「春の小川」で身につける思考としては、授業後ワークシートが効果的であった（実践紹介）。「どんな小川ですか。」との発問に、子ども達は、歌詞や教科書の挿絵をよく見て答え、小川を具体的にイメージしていた。</p> <p>どのような声で歌うとよいか考えさせるために、「誰が誰に『さけよさけよ』と言っているのか。」との発問があった。そこから、どのように歌ったらよいか考えさせ、ワークシートには「優しい声で歌う。」など書かれていた。</p> |  |

2. 研修会の成果

今年度は、Zoomによるオンライン研修を実施した。会場外で参加された部会員もおり、会場が密にならずに実施することができた。また、「ドレミ体操」の実践を会場で行うことができ、今後の授業に活用できる内容であった。新学習指導要領に基づき、音楽の授業はどうあるべきか考えるよい機会となった。

V. 部会研究の成果と課題

1. 成果

新型コロナウイルス感染症の影響により、今年度は小学校・中学校共に教育課程を大幅に変更しながら研究を進める形となった。歌唱を中心とした表現活動が困難になり、例年とは違った形の実践を考慮しなければならなかった。このような状況の中で部会員一人一人が今できる実践について深く考え、様々なアイデアと工夫で表現活動を実践できたことが、大きな成果である。

2. 課題

今年度予定していた学習活動が十分できず、歌唱などで十分な積み重ねがないまま学年が上がることになる。新型コロナウイルスの影響がどのくらい続くのか先が見えない中、限られた時数の中でできることを、今後も模索しなければならない。指導者側が「多様な学習活動の在り方」について、今後もしっかり考慮していく必要がある。

（文責 高田 紅花・中野 いづみ）